この新たなる魔王候補に祝福を

ニラ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目が覚めると真っ暗闇の空間で、其処には自分を見下ろすように金髪の美少女が立っていた。

どこの誰かは知らないが、ついでに自分もどこの誰？

え？　金色の魔王？

目次

01 ―― 1

02 ―― 17

03 ―― 34

01

「いい加減に起きなさい、幾らなんでも寝すぎよ」

急に掛けられた声に、俺はハッ！として飛び起きてから視線を彷徨わせた。

その声自体が呼び声にでも成ったのか、急激に覚醒していく意識。

――――念の為に言っておくが、何も頭を蹴られたことが理由で目覚めたわけではない。

ないったら、ない。

自身の五感を通して、徐々にでは有るが周囲の情報が俺の中へと入ってくる。

その場所は暗い。それはもう、途轍もなく暗い場所だった。辺り一帯を深い闇に覆われ、だというのにどういう訳か酷く眩い。

何を言ってるのか解り難いかもしれないが、心の奥底に響く、身も心も凍りつくような恐怖と、そして心を熱くさせるほどの憧れと羨望が綯い交ぜに成ったような奇妙な感覚。

それが、俺の心と視界を覆っているのだ。

だから此処は、酷く暗くて、酷く眩い。

だが……何故、俺はこんな場所に？

「ふーん……理解が速いのね、あなた。でも、『こんな場所』っていうのは言いすぎじゃないの？」

俺が頭の中で色々と考え込んでいると、最初に声を掛けてきた人物――――いや、人物という表現が正しいモノなのかは解りかねるが、兎も角、その相手が再び声を掛けてきた。

もっとも、俺はその相手にどう対応すれば良いのか判断がつかず、ただただ

「……誰だ、アンタは？」

としか、言うことが出来なかった。

視線を向けた先に居るのは、見たところ普通の少女。

金色の長い髪の毛を持ち、あらゆる物に希望を持ちながら、あらゆる物に飽いているような不思議な瞳をした少女であった。

そしてどういう訳か、この少女からは自分がこの場所で感じた感覚を強く、いや寧ろ、この少女を中心にして強く感じる。

これは、この少女は、何か別のナニかではないだろうか？

俺は瞬間的に、そう感じていた。

「ウフフ、誰……か。難しい質問ね、それは。色々な呼び名が有るけど……Ｌって呼ばれ

ることが多いかしら？」
「L（エル）？」
相手は妙に柔らかな笑みを浮かべながら、自身の名前を告げてくる。L？　……エル……。どっかで聞いたことがある気がするが。
さて、何処だったか？
「あら？　私のこと知っているの？」
「いや、会ったことはない筈だ。流石にコレだけ印象に残る相手なら、忘れるわけがないだろうからな。……ただ」
『L』と呼ばれた名前には、何か聞いたことが有るような気がする。……短い名前だし、何かの略称として聞いたことが有るのだろうか？
しかし、俺は考えている事を口に出したりでもしたか？
なにやら口にしてない部分まで、Lの奴は返答している気がするんだが？
「――いいえ。貴方は何も喋ってはいないわ。でも、解るわよ。私には」
……は？
何言ってるんだ、コイツは――
「コイツだ～……っ!?」
ふと、俺が一瞬だけ頭の中で思ったことに反応を示してくるL。

え？　なんだ？　……冗談じゃないのか？
「ふん！　冗談なんかじゃあないわよ。私には、これくらいの事どうということはないんだから」
腰に手をやり、（無い）胸を張るようにしながら言い放つエル。
……成る程。どうやらこのエルとか言う少女は、やはり見た目通りの人物ではないようだ。
実際は、そう見えるだけの『別の何か』というのが正しい存在なのだろう。
「……別の何かって、止めてくれない？　その言い方」
しかし、なぁ。残念ながら他の言い方が思い浮かばない。
「普通にエルってだけでいいでしょ！　それと、会話するならちゃんと口に出して喋りなさいよ！」
そう言うならば、俺が思ったことに反応するのを止めればいいのでは？
「――――それは普通に会話してるみたいに聞こえてるから……あぁ！　もう！　解ったわよ！　暫く貴方の心を読むのは止めるから！」
「そういう言い方をされると、まるで俺が無理矢理に言うことを聞かせたみたいなんだけど？」
「似たようなもんでしょ！」

そうかぁ……？

どう考えても、Ｌの一人芝居にしか見えないのだが。

とは言え、マトモにやりとりが出来るというのならソレに越したことはない。

「じゃあ、改めて宜しく。Ｌ」

「ええ、宜しく」

ニコッと微笑みながら、Ｌとガッチリ握手を交わす。

瞬間、『柔っこいな～』とか、『コイツ、すっごい美人だな～』とか考えるが、今のＬは俺の心を読んでは居ないらしいので――――ってッ!?

「……」

やたらとニヤニヤしているＬが目の前に居る。

コ、コイツ、おい！　心を読むのを止めたんじゃないのか！

「――――っ!?　……さ、さて、お互いに友好を誓ったということで……」

途端にビクッと肩を震わせて、コホンとワザとらしい咳払いをするＬ。読んでませんよ――――聞いてませんよ――――ってことをアピールしているのだろうか？

だとしたら演技が下手くそすぎる……。

「ところで……ねぇ、ちょっと聞きたいことが有るんだけど？」

ふと、Ｌは此方を見上げるようにしながら質問をしてきた。

……コイツ、随分と身長が低いからな。どうしてもこう言う、あざとい視線の向け方をしてくるんだろう。

しかし、聞きたいこと？

いったい何を聞きたいというのだろうか？

「私が聞きたいのはね。……ズバリ、貴方の名前よ！」

ドーン！　と、指を突きつけて言ってくるエル。

なんだ、何かと思えばそんなことか。

しかし、まぁ、それはそうかもだよな？

本名では無いだろうがLの方は名乗っているのに、俺のほうが名乗らないなんてのは、ちょっとだけ不公平だ。

「そういえば自己紹介がまだだったな。俺は――――……ぁ」

「俺は？」

「チョット待ってろ、変に急かすな……！　ええっと……名前は」

ニコニコッと笑みを浮かべながら言ってくるLに、俺はピシいっと固まって動きを止める。

そして眉間に皺を刻んで、言葉の続きを絞り出そうとするのだが。

……なんだ？　続きが、出てこない？

「あ、俺は……えっと……あれ？　なんでだ？」
「あらあら？　どうしたのかしら？」
Ｌと名乗った少女に対し、自己紹介を返そうかと思ったのだが……不思議とアレ？と首を傾げる事になってしまった。
何故って？……名前が、出てこないのだ。
そんなバカな事があるか――――と、思い出そうとするのだが、やはり名前は浮かんでこない。
頭の中、記憶の奥の奥にしまい込まれてしまっていて、何故か自分の名前が思い出せないのだ。
「あらあら、もしかして、自分の名前が思い出せないのかしら？」
自分が解らない――――といった、俺からすれば結構大問題な出来事なのだが。直接関係がないからだろうか、Ｌの奴はニヤニヤと面白そうに笑みを浮かべている。
―他人事《ひとごと》だと思って、随分と好き勝手にしているじゃないか。
「――――まぁ、仕方がないわね。今はともかく、元が人間だもん。こうして私の前に居ること自体が奇跡なのだから。名前の１つや２つくらいは無く成るでしょう」
「……なんだよ、それ？」
「それくらい、在り得ないことに貴方はなっちゃってるってことなのよ」

ニコニコと楽しそうにしているLは、徐にパンパン――と手を叩いた。
すると
「――お呼びでしょうか、L様」
突然、俺とエルの横合いから声が響く。
驚いて視線を向けると、何と言うべきなのか……空間が歪んで居る？
その光景に驚き眉間に皺を寄せると、その歪んだ空間からニュッと腕が生えてきた。
次いで顔、上半身と、気が付くと人が一人姿を表したのだった。
見た目としてはメイド。
しかしそれは格好だけで、その表情はまるで殺し屋か何かだ。少なくとも、普通の仕事を生業にしているとは思えないような、底冷えのする様な雰囲気を醸し出している。
Lはその人物に視線を向ける。
「私、コイツとじっくり話がしたいから、チャチャッとお茶の準備してくれない？」
「――コイツ？　……この妙な奴とですか？」
「そうよ」
Lの言葉に、その人物は訝しげな視線を俺へと向けてくる。
そんな殺すような視線を向けられても、俺としては困るのだが……。
とは言え、いきなり何かをされるなんてことはないだろう――と、逆にジッと相手

を見つめ返してやる。
　すると相手は
「……畏まりました」
　と、一言告げると再び歪んだ空間の向こう側へと消えていく。
　『解った』って、お茶の準備をしてきますってことか？
「……へぇ」
「なに？」
「ううん。やっぱり、貴方は普通じゃないみたいだわね」
　Ｌは楽しそうに言うと、スタスタ歩いて移動をする、俺はそれに付いていった。もっとも、移動はあっという間。
　いきなり目の前に現れたテーブルセット。そして其処には２つの席が用意されており、Ｌは俺に
「座りなさい」
　と促してきた。
　……本当にお茶会をするつもりのようである。
　俺は言われるままに席に座ると、何処からとも無く
「どうぞ」

――と、手が伸ばされてお茶の入ったティーカップが置かれる。
視線を伸ばされた手の方へと見やれば、先ほどのメイドが立っていて、
「お茶菓子もどうぞ」
と、これまた睨むような視線をぶつけながら俺の前にクッキーを載せた皿を差し出してきた。
ええ、っと、有難うです。
「(チッ)」
ハハ――。
内心で舌打ちでもしてるのがアリアリと解る。
そのメイドの反応に、俺は少しばかり苦笑を浮かべた。
しかし俺に解る程度のことは、どうやらLにも解っているようで――
「ちょっと、部下W……。笑顔が足りないんじゃない？　もう少し愛想良くしたらどうなの？」
「――ッ!?　も、申し訳有りませんでした！　L様ッ!!」
一瞬、ゾクッとする程に冷えきった声で忠告をしてくるLに、メイド――部下W？は、怯えたように平身低頭。
まぁ、簡単にいえば『アクロバティック土下座』を敢行する。

それはもう、ズザザザザーー!!　って具合にだ。
なに？　そんなにおっかない奴なの、Ｌって？
「うーん……。相変わらず代わり映えのしない味ね、貴女の入れるお茶って。まぁ、不味い訳じゃないから良いけどね」
「き、恐縮です……」
「――――あ、貴方もほら、遠慮しないで頂いちゃっていいわよ？　コイツの用意するお茶って、それなりにイケるかから」
「あ、あぁ。それじゃ遠慮無く」
相変わらず怯えるようにしている部下Ｗを他所に、俺はＬに促されるままにお茶を一口飲んでみる。
あ、普通に美味い。
「結構良いでしょ？　私も偶に気が向くと、部下Ｗ（コイツ）にお茶を入れさせてるのよ♪」
「へぇ……専属メイド、みたいなものか？」
「専属メイド？　……ブフッ！　ク、アハハハハハ！」
何がツボに入ったのだろうか？　Ｌは突然に大声で笑い出した。まぁ、先ず間違いなく、部下Ｗを『メイド』と呼んだことが理由なのだろうが……。
とは言え、普通にメイド服を着ているし、やってることもメイドそのものだからなぁ。

「アハハハ！　メイド！　メイドだってさ！　一応はアンタ、魔王なのにね!!」
腹を抱えて爆笑を続けるＬ。なんだろうか？　箸が転がっても面白い年頃なのだろうか？
チョットだけ可哀想なモノを見る視線に成ってしまうが、それは少し他所においておこう。
今しがた、Ｌは興味深いことを口走ったぞ？
確か、そう、『魔王』と。
俺はＬに魔王と呼ばれた部下Ｗに目を向けると
「……Ｌ様、もうソレくらいで」
と、大笑いを続けているＬを諌めるように声を掛けていた。
しかし
「は？　なに？　なんなの？」
「すいません！　ごめんなさい！　申し訳ありません！」
と、底冷えするようなＬの視線を叩きつけられた部下Ｗは、再びアクロバティック土下座を行って、額をガンガンと床に打ち付けだした。
オイオイ……。もうその辺で止めたほうが良いんじゃないか？　そんなことしてたら割れるぞ、床が。

――――あ、罅(ひび)が入った。

「あぁ、はいはい。もう良いわよ。……全く、何かって言うと直ぐにこうなんだから」

そんな『つまんなーい』みたいな言い方するなや。

あの人、めちゃくちゃ怯えてるぞ？

「なぁ、ところで、ちょっとだけ気になるんだけど良いか？」

「うん？　何かしら？」

既に土下座の部下Wには興味が無いのか、エルは俺の方へと向き直って視線を向ける。俺は土下座中の部下Wをチラッと見る。

非常に、本当に非常～～に聞き難いのだが。

「さっき言ってた、この人、さっき魔王って？」

「あぁ、――――ウフフッ！　……うん、この『メイド』ね。確かに魔王よ」

「それって、漫画とかアニメとかゲームとかに出てくる魔族の王様って奴のことか？」

「そうね、種類としては同じ様なものじゃないの？　えぇっと、確かコイツは……白霧(デス・フォッグ)って呼ばれてるんだったかしら？」

「ですふぉっぐ？」

「ええ」

聞き返した俺に、Ｌはニコッと微笑みながら頷いてくる。

しかし、俺は部下Ｗの呼び名に違和感というか……やはりちょっとした聞き覚えを感じていた。続けるように

「白霧（デス・フォッグ）……」

と口にして、口元へと手をやって考えてみる。

すると、フッ――――と、とある名前が浮かんできた。

それは

「蒼穹の王（カオティック・ブルー）、闇を撒くもの（ダーク・スター）、赤眼の魔王（ルビー・アイ）……そして、白霧（デス・フォッグ）……！」

次々と脳裏へと浮かんでくる名前の数々。

不思議な事であるが、俺はやけにスンナリと其の名前を口にした。

何故だ？　どうしてそんな名前の数々が思い浮かぶ？

「へえ、自分のコトは思い出せないのに、私たちのことは知ってるんだ？　丁度いいけど……本当に面白いわね」

ニィっと笑みを浮かべているＬに、俺はそれでも訝しげな表情を向けずには居られない。俺の思い浮かべた名前の１つ、白霧（デス・フォッグ）がメイド姿のこの人物だとするのなら、このＬという少女は……

「金色の魔王（ロード・オブ・ナイトメア）……か？」

「フフフ、そう呼ばれることも有るわね」

相変わらずの極上の笑みを浮かべている少女（エル）は、自分のことを金色の魔王（ロード・オブ・ナイトメア）だと、そして土下座中のメイドである部下Wを魔王 白 霧（デス・フォッグ）だと言ってきた。

世界の母にして全ての母。

混沌の海その物にして世界を覆う力の意思。

最強の神魔である王の中の王、金色の魔王（ロード・オブ・ナイトメア）。

「――――ッ!?」

次々と頭のなかに思い浮かぶ知識の数々。

俺はその知るはずのない知識に、思わず眉間に皺を寄せた。

訳が解らない。

なんだってんだコノ奇妙な知識は？　解らない筈なのに、俺は『この相手』を知ってるぞ？

「言っておくけど、私達は正真正銘の本物よ」

「……俺がどうやってこの状況を理解しようかと考えている所に、言葉を挟まないでくれよ」

「だって、何考えてるのかが丸わかりな顔だったからね」

いったい何がそんなに楽しいというのだろうか？　……まぁ、愚問だったな。間違いなく俺の反応だろう。

Ｌはニヤリッと笑っていて、俺の表情の変化の一つ一つを楽しんでいるように見える。

正直……認めたくはない。

そう、認めたくはないのだが、俺がこの場所で呼び覚まされてから感じている雰囲気。Ｌが、俺の心を読んだという事実、そして部下Ｗを含めた二人からヒシヒシと感じ続けている奇妙な感覚。

それら全てが正しいと告げているのだった。

02

Lと部下Wの二人は正真正銘間違いなく、本人たちが言うとおりに本物のソレであるようだ。

もっとも、何故そんな風に思うことが出来るのか？　と聞かれると……正直なところ俺自身も上手く説明することが出来ない。

唯なんとなく、それが正しいことであるように思えるというだけのことなのだから。

「――――解った。二人がそういった、超常的な存在だと一応は納得してみる」

「あれ？　慌てるターンはもう終了？」

「いやだって、それじゃあ話が進まないんだろ？」

「まー、ソレはそうなんだけど。身も蓋もない言い方よね、ソレって」

話を進めようと言った俺の言葉が、どうやらLには面白くなかったようだ。ふくれっ面を浮かべて、抗議するように此方をジロっと見つめてくる。

「でも、Lが金色の魔王（ロード・オブ・ナイトメア）だとするなら、俺がここに居る理由は何なんだ？」

「え？」

「自分のことがサッパリだというのに、何故か奇妙な知識だけは持っている俺が此処に居る理由……。Ｌは知ってるんだろ？」
「それは、まぁね」
　Ｌは言いながら腕組をすると、「うーん」と唸りだした。
　……まさか、今から理由を考えるとかは無いだろうな？
「うーん……そうね……言うなれば」
「言うなれば？」
「暇つぶし？」
「……オイ！」
「冗談よ、冗～談！　やぁ～ね、そんなに怒らないでよ♪」
　本当に理由も何も無いとかじゃないだろうな？
　嫌だぞ。何も意味が分からない内に、こんな状況とかは……。
「しょうが無いわね。私としては、もう少し楽しんでから核心の部分を話したかったんだけどなぁ。ま、良いか」
　それなりに楽しんだから――――と、Ｌは言うと、俺の事をジッと見つめてくる。
「簡単に言ってしまえば、新しい神や魔王の創造かな？　厳密に言えばその何方でもないんだけど、そのために貴方の魂を引っ張ってき来たってところかしらね？」

「新しい？　創造？　そこの侍従魔王（デス・フォッグ）みたいな？」
Ｌの言葉に対して、俺は今しがた御茶の準備をしてみせたメイドの事をチラリと見る。俺の知識が正しければ、白霧（デス・フォッグ）はＬに依って創造された魔王の一柱のはずだ。
すると俺の視線に気が付いてか、メイド（白霧（デス・フォッグ））は「チッ……！」なんて舌打ちをして睨んでくる。
オイ……嫌われるようなこと、何かしたか俺？
「そうそう、コイツみたいな魔王の創造ね。私が数多くの世界を創りだして、ソレを監視する存在だっていうことは知ってるわよね？」
「あ、あぁ。後は、あらゆる者にとっての母のような存在だとかな」
「そう。でもね、何も全ての世界でコイツ等みたいに神や魔族で戦わせてるわけじゃないのよ？　単純に放置しっぱなしの世界だってあるしね」
放置しっぱなし？　それはどういう事だろうか？
知的生命体は居るが、それを見守る存在も、仇なす存在も作りはしなかったということか？
「普段の私は、そういった世界のことも含めて只々眺めてるだけなんだけど、それだとちょっと刺激が少なく感じる時が多いのよね。んで、そういった世界の一つにテコ入れしようかな……なんて思っちゃって♪　幸い、色々と手が入ってるみたいだし、私が横

から入ったって文句はないでしょ」
弾むような声色で可愛らしく言っているが、Ｌは『自分が暇だ』といった理由のために、一つの世界に神や魔王といった超常的存在を創ろうと言っている。
……なんとも、まぁ。
その世界の住人にとっては傍迷惑な話だな。
――うん？　ちょっと待て？
俺が此処に居る理由を聞いていたのに、どうしてそんな魔王だの神だの、世界へのテコ入れだのと言った話になるんだ？
「オイ、ちょっと待てＬ」
「まぁ、ぶっちゃけると、私が作った世界に行って、魔王にでもなって来て欲しい訳なのよ」
「ぶっちゃけるな！」
待てというのに、構わず突っ切るＬに思わずツッコミを入れる。
全くなんだって言うんだコイツは？　幾らなんでも自由が過ぎるだろうが！
「何よ、なにか不満なの？」
「何か不満って……あのなぁ」
色々と好き放題に決められて、それで『はい、解りました』なんてなるわけ無いだろ。

「大体だな、俺が一人で行ったからって世界がどうにかなんて成るわけ無いだろう？」
「なんでよ？　それなりに色々なことが出来る思うわよ？」
「出来ないだろ。俺って記憶が変になってるけど普通の人間の筈だぞ」
――と、当たり前のことを告げたのだが、……何だ？
Lはコテン――と、首を傾げて、俺に向かって『何言ってんだ、コイツ？』といった表情を向けてくる。
止めろ本当に。
お前は無駄に容姿が可愛く設定されているからか、そういった表情は結構グサッと来るんだ。
「えぇっと、普通の人間？　誰が？ねぇ、部下W。この場所に普通の人間なんて居るかしら？」
「……いいえ！　この場には其のような者は一人も居りません！」
何言ってるんだ――的な表情のままに、Lは土下座中であった（まだやってたのか!?）部下Wに問い質す。
すると部下Wは緊張したように勢い良く立ち上がり、まるで上官に返事をする新兵のようにキビキビと回答をする。
……そういや部下W（コイツ）さっき、オレのことを妙な奴とか言ってたな。

「なんだよ、ソレじゃあ俺は其処に居る白霧（デス・フォッグ）みたいな、魔王にでも成ってるっていうのか？」

チラッと部下Ｗを見てみると、それに反応した奴が睨んでくる。

だから、一々睨むなっての。

「うーん、まだ魔王や神ってわけじゃないけど。ただ、規格外と言うのもおこがましい程の魔力のプールとバケツ、それと精霊や私達への親和性を持った――――限りなく魔王（それ）に近い存在（ナニカ）って所かしらね？」

「……ナニカって、ソレは絶対褒め言葉じゃねぇな」

「う～ん、説明するのが面倒なんだけど。……そうね。魔王や神なんて言われている連中が、言ってしまえば単なる精神生命体だって言うのは知ってるでしょ？」

「あぁ。単なるって所に若干の違和感を感じるが理解はしてる。変にそういった知識は有るみたいだからな」

Ｌの問いかけに頷いて返す。

元々、Ｌの言っている神々や魔族と言う存在は精神世界（アストラルサイド）に本体があって、普通の世界に現れているのは受肉化した別の身体なのである。

其のため、物質世界でどれだけ体が破損しようと痛くも痒くもなく、仮にダメージを与えるにしても精神世界に直接干渉ができるような武器や魔法を使わなくては成らな

いのだ。
俺の知っている物だと、有名な物がエルメキアブレードや光の剣なんかが該当する。
「物質的な世界に存在している魔族や神っていうのは、半精神生命体っていうのが言葉としては適当かもね。向こうの世界で働いてるのが影法師で、本体はコッチみたいな、ね。
で、今の貴方は、言ってしまえば半精神生命体と同じ存在に成ってしまっているのよ！」
どーん！　と、効果音でも付きそうな大仰な身振りを交えながらエルは説明をしているが、なんだろうかコレは？
俺は『な、なんだってぇ！』とか言ったほうが良いのだろうか？
しかしなんだ、今の説明の内容は？
それじゃあ、まるで俺が魔族と同じみたいじゃないか。
「より正確には、人間の魂をベースに造られた、限りなく魔族や神々に近い存在って所ね。まぁ、私の作った魔王だの神だのが相手なら、素材的には貴方の方がずっと上等よ？」
「それ、神や魔王としての立場がなくないか？」
「ソレくらい頑張って貴方を作ったってことよ。まぁ、力が強いかどうかってのは別ん

問題なんだけどね」
「今ひとつ理解が出来ないんだが。要は普通の人間よりも魔法を使い易いってことか？」
「まぁ、その程度の理解の仕方でもいいわ。そういう意味でもあるからね。でもね、私との親和性が高いってのは凄いことなのよ？　なにせ私の力を使えば、其処に居るメイドなんて一瞬で蒸発させることも出来るんだから」
「Ｌ様!!」
「だって本当のことだし。まぁ、今はまだ無理でしょうけど。将来的に貴方が全力が出せるようになれば、多分『他の３人』も含めて同時に相手をしても互角以上に戦えるんじゃないかしらね？」
　エルの言葉に対し、今までビクビクと震えているだけだった部下Ｗ（デス・フォッグ）が声を荒らげる。更に部下Ｗ（デス・フォッグ）は俺に向かってギロリと睨むような視線をぶつけて来た。
　しかし、他の３人ってのは――他の魔王連中だろうか？　流石にあんな馬鹿げた奴らを同時にどうにか出来るなんて、冗談でも思えないのだが。
　少なくとも部下Ｗ（デス・フォッグ）も同じ考えだろう。
　エルの言葉に反発するように目を細め、俺を鼻で笑うようにしている。
「幾らなんでも、こんな産まれたての奴に私が……ヒィッ!?」

――――が、急に怯えたように肩を震わせると、直ぐ様にその震えは全身へと広がっていった。

なんだか、失礼極まりない反応である。

「なッ!?　き、貴様！　そ、その瞳は!!」

指さして何やら言ってくる部下W（デス・フォッグ）。

というか、瞳？　何を言ってるんだ？

「あ、はい鏡」

疑問符を浮かべた俺に、Lが隙かさず手鏡を差し出してくる。

Lのこの素早い対応、コイツ、やりおる……。

と、冗談はさておき。渡された手鏡をのぞき込むと、其処には恐らく俺であろう人物が映しだされていた。

「眼が金色？　髪の毛が黒いのになんてバランスの悪い……って、誰だ、これ？」

「言ったでしょ？　気合入れて作ったって。今の貴方は言うなれば私の半身みたいなものよ。まぁ、厳密に言えば少し違うんだけどね」

半身？　……俺とLの共通点は、瞳の色だけだぞ？

「私の一部から分けられた私自身。そして私でありながら全くの別な存在……それが今の貴方よ」

……相変わらず良く解らないが、神話に出てくる神が持つ別の側面――神性といった事だろうか？

ヒンドゥー教の神であるシヴァ神は世界の終末を告げる破壊神であるが、日本では巡り巡って大國主命（オオクニヌシ）と同一視されて国護りの神と呼ばれている。

破壊と守護という別の側面を持つ神であるが、元を正せば同じ神。

つまり彼女（エル）が言いたいことは、俺は金色の魔王（ロード・オブ・ナイトメア）本人ではないが、元を同じくする別人だということだろう。

しかし、

「おめでとう♪　貴方は、人間から違うナニカに転生しました♪」

「その、妙に明るいノリを止めろ」

楽しそうにしてやがるな、コイツは。

ニヤニヤと笑いながら、パチパチと拍手をするＬ。

そのＬに併せているのか、部下Ｗも睨みながらも拍手をしてくる。

……というか、嫌なら拍手するなよ。

「なぁ、これって会社的な枠組みだと、エルが不動の会長職で、他の魔王や神々が役員。だけど其処に会長の鶴の一声で、俺という新人が役員の上役に現れた――的な感じなのか？」

「そうそう、それよそれ、そんな感じ」
「でも、俺……何かが出来そうな気は全然しないんだけど？」
「ソレはそうでしょ、貴方一応は生まれたばかりなのよ？　力の使い方も知らずに何かが出来る訳が無いでしょ？」
「む……」
　じゃあ何か？　お前は何も出来そうにない小僧を、そのまま新たな世界という、寒風吹きすさぶ荒野へと放り出そうとしたのか？
「……それも面白そうだけど、まぁ、私も別に新しい世界に急がせる訳じゃないし――――部下W、ちょっと此方にいらっしゃい」
「え、あ、はい」
　クイクイっと指を動かして、部下Wを呼びつけるL。
　なんだ？　俺の前で、部下Wに実演させるのか？
　テキパキとエルは指示をすると、部下Wを俺の向かいへと移動させる。
「いい、良く聞いてね。部下W（アイツ）や他の魔王たち、それから神々や魔族なんかもそうなんだけど、連中は基本的には自分の持っている力を吐き出して、ソレを何らかの形に変換して現実世界に効果を表しているにすぎないわ」
「俺にもソレをやれっていうのか？」

「うーん、ソレでも良いんだけどね……。多分、今の貴方には出来ないでしょうね。力の扱いに慣れてくれれば、そういった事も出来なくわないでしょうけど、最初のうちは力の扱い方を初心者用に纏めた物を使った方が良いでしょう」
「なんだよ、その初心者用の力の使い方っていうのは」
「ズバリ、魔法よ！」
　ビシィッ！　と指を突きつけてドヤァっと言い放つＬ。
　しかし簡単な方法が魔法とか、世の中の科学万能主義者が聞いたら発狂するんじゃなかろうか？
「一応は部下Ｓの世界にある魔法の基本的な理念と概要は、貴方をこっち側に引っ張ってきた時に埋め込んであるはずなんだけど？　パーになってなければね」
「そんなこと急に言われても――――あっ」
「『あっ』って、反応薄いわね」
　Ｌに言われて考えようとしてみると、確かに其のことに関しての知識が浮かび上がってきたのが解る。
　それは一般的な精霊魔術から、白魔術、神聖魔術、黒魔術と多岐に渡る知識であった。
「まぁ、後は魔法の扱い方かぁ……。うーん、魔力の使い方って私達からすると感覚的なものだからなぁ。そうねえ、解りやすく言えば、『考えるな！　感じるんだ！』ってこ

とよ」
「結局そんな結論になるのかよ」
無茶を言う。
しかし、ソレくらいに感覚的な事だということなのだろう。
それに逆に深く面倒な説明をされても、途中で考えることを拒否してしまいそうだしな、俺は。
幸いにして魔法の扱い方に関しては知識としては知っているんだ、後はそれを行動に移すだけだろう。
魔力の練り方は――――っと。
「あ、あのL様？　何故私の対角線上にソイツが立っているのですか？」
「何故って、これから力の試し撃ちをするからでしょ？」
「そ、それって！　もしかして私にですか!?」
「当たり前じゃないの」
当たり前なことを何を今更――――と言うように、Lは部下Wに言い放つ。まぁ、俺も此の配置に成った時に感じてはいたんだが、ちょっとビクビクし過ぎじゃないのか？
あの魔王？
「ま、待って下さい！　どうして私がソイツの実験台なんかに!?」

「ソイツじゃないわ。今さっきだけど、ちゃんと名前を決めたから」
「え、俺の名前？」
「ええ。貴方の名前は、白銀の王（シルバリオ・ロード）。部下Ｓとイニシャルが被るから……貴方のことは普通にシルバって呼ぶわね」
「白銀の王（シルバリオ・ロード）……シルバ。それが俺の名前？」
……なんだか年寄りみたいな名前だな。
いや、俺の勝手なイメージだけどな。
「さて、それじゃあシルバ。……殺っちゃいなさい♪」
「エ、エエエエエ、Ｌ様！　じょ、冗談ですよね!?　ね!?」
「え？　冗談なんかじゃないわよ？……大丈夫だって！　アンタ、仮にも魔王なんだから。デーンと構えてなさいって！」
「そ……それって、仮に直撃しても大丈夫な攻撃なんですか？」
「……」
「なにか言ってくださいよっ!?」
本気で嫌がっている部下Ｗの姿に、俺は思わず涙がポポロ。……恐らくは普段から、Ｌによってコンナ扱いを受けているのであろう。
――まぁ、だからと言って俺が奴を庇ってやるということはない。

だって魔王だぞ？

俺の頭に残っている知識？　記憶？　まぁ、ソレの中に有る、部下Wと同格の魔王、赤眼の魔王シャブラニグドゥ（ルビーアイ）の強さは、僅か7分の1、しかも半覚醒状態でも冗談のようなものであった。

今、眼の前で本気でLに懇願をしている部下Wは、正真正銘、純覚醒のうえに分割もされていない状態の魔王だ。

俺がちょっと何かした程度では、大したことに成るわけがないだろ。

「色々と揉めてるようだけど、やってみても良いのか？」

「うん。勿論。いつでも良いわ」

「L様ぁーーーっ!?」

手を上げて、自分の存在をアピールした俺は、部下Wに大してニコニコといった笑みを浮かべた。

部下Wは俺の言葉に肩を震わせると、その場から逃げ出そうと脚に力を込める。

……だが残念。ソレよりも早くエルが手を翳すと、部下Wの身体がピタリと動きを止めてしまう。

……なんだ？　と、目を凝らしてみると、何やらエルから放たれている不可視の力が部下Wを縛り付けているらしい。

まぁ、不可視の力なのに目を凝らしてとか変なコトを言っているが。
しかし俺は、そのエルの扱う力に驚きを感じつつも少しだけワクワクもしてしまう。
だって、あんな不思議な力が俺にも使えるかもしれないんだぜ？
「じゃあ、シルバ。後は頭の中に浮かんでいる魔法の呪文を唱えて見なさいな」
「了解。……えーっと、あー、こうか？
――悪夢の王の一欠よ、天空（そら）の戒め解き放たれし凍れる黒き虚ろな刃よ――」
「――ひぅッ!?　それは、その力は!!」
「へぇ、適応能力が高いわねぇ♪」
力の込められた言葉を口にすると、自身の体を中心に金色に輝く黒い力が集まってくるのを感じる。
俺はその力を制御し、自身の掌に向かって集めていった。
「――我が力、我が身となりて、共に滅びの道を歩まん。神々の魂すらも打ち砕きッ！
――神滅斬（ラグナブレード）ッ！」
呪文の詠唱を終えた俺は、一呼吸を置いてから最後の言葉を口にする。
瞬間、その迸るほどの力は黒いエネルギーとなって掌から溢れ出し、バチバチと放電するように唸りながら巨大な剣の形へと変化した。
金色の魔王（ロード・オブ・ナイトメア）、世界の根源たるLの力を用いて産み出された漆黒の剣。それが、この

神滅斬（ラグナブレード）だ。体から何かが抜けていく感覚を感じるが、もしかして魔力という奴が抜けていっているのだろうか？

「さて、それじゃあ試し切りと行きますかね？」

ニコッと笑みを浮かべた俺は、神滅斬（ラグナブレード）の切っ先を部下Wへと向けた。

見るからに変化していく部下Wの表情に俺は少しだけ面白そうに笑みを浮かべてしまう。

でもまぁ、大丈夫だろう。

だって相手は魔王だぞ？　俺がちょっと魔法で何かしたくらいじゃビクともしないさ。

振り上げた神滅斬（ラグナブレード）の刃を、俺は自分に言い聞かせながら勢い良く振り下ろしていくのだった。

０３

「気がつけば、城壁の片隅にポツンと立っている。あぁ、寂しやなぁ」

寒風吹きすさぶと言う程ではないが、夏の終りが近いのだろう。程よい気温を肌が感じる。

城壁を見るに、どうやら何処ぞの街の外に放り出されているらしい。

果てさて、どうしたものか。

俺はＬの奴から幾つか言いつけられたことが有る。

一つは、この世界で力をつけること。

もう一つは、この世界に存在するらしい自称『魔王』なる存在を打ち倒す努力をすることだ。

別に魔王とやらを真剣（マジ）になって倒す必要は無いらしいが、少なくとも倒そうとする素振りはしておけ――――ってさ。

うーん、よく分からん。正直に言えば面倒くさい事この上ない。

とはいえ、あまり自分勝手に行動をして、ソレらしい行動を何もしない自堕落な生活を送っていてはＬに存在を消されるかもしれない。

俺はLの一側面であって、同格の存在ではないからだ。
「しかし、どうせ送るって言うなら、餞別に『裂光の剣（ゴルンノヴァ）』とかくれれば良いのになぁ」
現在の俺は、装備品：旅人の服
てな感じの貧弱装備。
こんな俺が金色の魔王の半身とか、いったい誰が信じてくれるのだろうか？
「……まぁ、取り敢えずは１００年くらいは頑張ってみるかぁ」
人間の寿命としては長いだろうが、区切りとしては丁度良いくらいだろう。
一先ずは、人間らしさの抜けきらない俺だ。今日の宿と飯の心配でもしなくちゃだが……。
「助けてくれーーーっ!! アクア、助けてくれーーーーーーッ!!」
「うーん。耳を澄ませなくとも聞こえる大絶叫……。但し、それは嬉しくも楽しくもないことに、男の声と来たもんだ」
耳に聞こえる悲鳴の声。余り心地良く感じないのは、魔王とか神とかの自覚が低いからだろうか？
「って、蛙、か？ アレは」
目を凝らさずとも見える程の巨大なカエル。体長は、おおよそ３～４ｍ程か!?
うげぇ……っ。特に両生類が嫌いな訳では無いと思うのだが、嫌悪感を感じて自然と

渋面になる。
いや、生理的嫌悪感と言うものだな。これは。
しかし、そんなカエルに追い掛けられている少年は、なんとも興味深い服装をしている。
もしかして、この世界では流行ってるんだろうか？　ジャージが。
ともかく、だ。コチラは右も左も分からない異世界初心者なうえに、生後ゼロ歳の種族ナニカだ。
俺は絶対にゴメンだが、カエルと命懸けの追いかけっこをしている彼からは面白い雰囲気を感じる。
話し掛けて損はあるまい。
「プークスクスっ！　しょうがないわね、助けてあげるわよ、ヒキニート！　その代わり、明日からこの私を崇めなさい！　街に帰ったらアクシズ教に入信して――――ひゅぐ」
「アクアっ!?　お前、食われてんじゃねぇ!!」
あれよあれよという間に、ジャージ少年の仲間と思われる少女がカエルにパクリとされた。
コレは、アレだな。間違いない。

ネタ芸の披露か何かだ。
だって、
「ヤバい、超絶面白いんですけどぉ～～っ！　ブフゥ！　アハ、アハハＨＡＨＡＨＡ！　ゲホッゴホッ……アハハハハハ!!」
素晴らしい、なんて素晴らしいコントだ。
良いぞ、良いぞ。そこの見知らぬ２人。コレなら見世物として金が取れること請け合いだ。そっちの道を目指すのであれば、きっと２人には明るい未来が――――って、あれ？
「モゴモコガモゴゴ……」
いったい何事が起きたのだろうか？　突然のこと過ぎて全く理解が出来ないが、急に俺の視界が真っ暗に染ってしまった。
そして、コレも何だろうか？　この体全体を覆う奇妙な生臭さと、気色悪いネットりとした粘液の感触。
あ、アレ!?　ちょっと、待ってくれ。俺の意思とは無関係に、俺の身体が逆さに持ち上げられて――――
「モ、モガグガーーーっ!?（く、食われた）」
オイオイ、冗談だろ。食われたって？　いったい俺を誰だと思ってるんだ。恐れ多く

も魔王の半身で――ちょっと、おい、やめ、止めろっ!!
口の中で舌を動かすな、気持ち悪いっ!!
こ、このぉ！　か、か、カエル風情がァっ!!!
頭にキタ、本気で頭にきたぞ！
完っ全に、消し飛ばしてくれるっ――!!
「モコモミュモモゴモクモゴゴ（闇よりもなお暗きもの）……もごぎょモゴモゴもごもぎょ（混沌の海よ、金色なりし闇の王）」
「グギィエゴッ!?」
「ふぇ?」
カエルに呑み込まれながら怒りを糧に呪文を唱えていると、不意にカエルの頭からが奇妙な叫び声が聞こえる。
その事に疑問を感じるが、次の瞬間にはカエルは地面に向かって倒れて行ったようだ。
「ぐへぇっ!?」
重力に引かれて落下し、突如、ゴロゴロと地面に投げ出されることになった俺は、先程のカエルみたいな情けない声を吐き出してしまう。
は、恥ずかしい。が、だが。

「げほ、ごほ、か、身体がカエル臭い……っ!?　ぐえ、なんつー拷問だ、コレ!!」
身体中にベッチョリと纏わり付く粘液で、恥ずかしいとか言っていられる状況ではなくなってしまった。
何だっけ、この状況。人を呪わば穴二つ？　俺……笑っただけなのに。
「お、おい。大丈夫か、アンタ？　凄い勢いで転がったな」
粘液で霞む視界の先には、先程までカエルに追いかけ回されていた少年が微妙そうな顔浮かべて立っていた。
うん。分かるよ。多分、俺が同じ立場だったとしても、きっと同じような表情を浮かべると思う。
「大丈夫。いや、大丈夫じゃない。凄く臭いが、命に別状は無い。途轍もなくカエル臭いけど」
「そんなに臭いを連呼しなくても……」
一度、俺と同じ目にあってみればきっとこの気持ちも分かるというものだぞ？
「――――っと、まぁ、でも助かったよ。流石にあんなことで死ぬとは思わないが、スタート初日でカエルに食われるとか、洒落にならない」
「あぁ、いや。お陰で討伐数が稼げたからコッチとしては良いけどさ」
「討伐数？　なに、カエルの討伐数を競う風習でもあるのか？」

「そうじゃなくて、ギルドの依頼でジャイアントトードを3日で5匹駆除ってやつなんだけどさ」
「えーっと、あー、アレかー、成程ー」
何を言ってるのかサッパリ分からないが、取り敢えず適当に相槌を打っておく。
そうすれば、ほら、まるでこの世界の住人のようだろ。
現に目の前の彼も――――
「……」
――――ものすっごい疑いの眼でジィッと見てきてるな。
おかしい。どこを間違えたんだろうか？
「あ、と、所で、そっちのお連れさん。見てるコッチが申し訳なくなるくらいに何だか凄い泣いてるんだけど。……大丈夫なのか？」
「グズ、グス……ふぇ、えぐ、えぐ」
同じ立場に陥った俺だかこそ、その悲しみは理解は出来るが。さて、何も知らない第三者には、粘液まみれの俺や彼女の姿がどう見えるのだろうか？
「あぁ、コイツか。……なぁ、アクア。今日は帰ろうぜ。今回はたまたま2匹倒せたけど、完璧に運だぞ。せめて、もう少し冒険者らしい装備が手に入ってからさ」
「いや、駄目よ！　そんなの駄目！　たかがカエル如きに、女神である私が引き下がるな

んて！」
「め、女神？」
「え、あ、いや、それは――――って、おい、待て、アクア!!」
女神という言葉に首を傾げると、少年は一瞬だけ体を強ばらせた。
その隙に少女――――アクアは、足に力を込めると未だ平原に鎮座しているカエルに向かって駆け出していく。
いい脚力だなぁ。
「神の力を思い知りなさい！　ゴッドブロー!!」
周囲に木霊する少女の声。そして、それに付随するように彼女の体から神気が高まっていく。
す、凄い。俺は確かに見た。彼女の拳が光り輝く様を。あの神々しい輝きを。
アレならばきっと、邪悪にして不浄なる者共を撃滅することが出来るはずだ。
ポニョん……！
……残念だ。俺の予想に反して、カエルの打撃吸収能力はかなりの物らしい。
可愛らしい打撃音が響いたかと思えば、瞳を数回ほど瞬きしたアクアを再びカエルが『パクリ』としてしまう。
「アクアーーーっ!?　このアホーー!!」

彼女の行動は残念な結果に終わってしまった。だが、俺は僅かでも彼女の行動に光を見いだしていた。

俺は自身の力を、情けない事だがまともに扱うことが出来ない。魔法という手順を踏むことで、『それっぽいナニカが出来る』ようになっているだけなのだ。

彼女の技は、まるでそんな俺に対する教科書の様じゃないか。

「アクアーーっ!!　うおぉおおお!!」

「ジャージの少年、俺も手伝うぞ！」

「済まない、援護を頼……む？」

素手のまま駆けていく俺はその拳に力を篭める。

コレが、俺の答え。

「見様見真似の必殺技！　喰らえっ！　魔王拳（デイモンブロー）!!　魔王拳とは、俺のよく分からない力が集まって放たれる必殺の拳。相手は死ぬ！」

アクアと呼ばれている見知らぬ少女よ……。見ているか、感じているか？　お前が見せてくれたゴッドブローによって、対カエル用の必殺技が産声を上げようとしている。

さぁ、死ね、死ね、死に絶えろ！

「フハハハハハハ――――は？」

「……」

「……あれ、効いてない？」

ズン!!　と叩き付けた拳であった。体全体に重くのしかかり、十分に手応えを感じた拳であった筈だ。

なのだが、カエルの方には何の反応も見られない。

どうやら俺は、魔法的な変な力以外の部分は軒並み能力が低いようだ。

少なくとも、現在捕食されている彼女並には。その変な力を上手く使えって？

馬鹿だなぁ。上手く使えるようにするために、俺はこの世界に来てるんだぞ？

まぁ、なんだ。幸いな事に、このカエルは何かを捕食中は身動きが取れ無いらしい。

俺は相手に叩き付けた拳を軽く振って、ゆっくりとした足取りで数歩後ろへと下がった。

そして、小さくため息を吐く。

「無念だ。無力な俺では、どうする事も出来ないなんて……」

「なんのために出てきたんだ、お前はっ!?」

そりゃ、カエルをどうにかしてやろうかと思ってさ。

まあ、非常に不本意かつ残念な結果になってしまったが。その熱意は高く評価をして欲しいものだ。

※

「いやぁ、何だか悪いね。俺の分の風呂代まで出して貰って」
「いや。アンタのお陰で1匹は退治出来たんだし、それくらいはな」
夕方になり、此処は冒険者ギルドが運営している酒場の一角。
カエルの粘液でベショベショになっていた体も、ジャージの少年――――サトウカズマ君の粋な計らいによって綺麗にすることが出来た。
この街、駆け出し冒険者の街と呼ばれているらしいのだが、いやぁ、中々どうして。素敵な入浴施設が完備されてるもんだよ。ちなみに、だからだと思うがカズマ君の仲間の少女、アクアは未だに入浴中だ。
女の子は身だしなみに時間が掛かるからねぇ。
「さてと。なぁ、一息ついた所で聴いておきたいんだけどさ」
「ん、なんだ？　残念だけど俺の個人情報は――――」
「お前、転生者だろ」
ズバッと言い切ってくるカズマ君。どうやら疑っている訳ではなく、確信めいた考えがあるらしい。
しかし、転生者……転生者ねぇ。

「確かに、俺は1度死んで生まれ変わったと思われるけど、どうしてそう思ったんだ？」
こうして周りを見渡して見れば、俺が着ている服装はそれ程に目立つものでは無い。つまりは、現地の人間に溶け込めているという事だ。
比べて、カズマ君の着ているジャージの方は明らかに場違いだろう。
どちらが上手く溶け込んでいるかで言えば間違いなく俺の方だと思うのだが。
しかし、そんな俺の疑問をカズマ君は鼻で笑い。
「いや、どうしてって。そんな黒髪に金色の瞳とか、モロに厨二病全開じゃねぇかよ」
「ちゅ、ちゅうに？」
「ブフゥ……っ！」
わ、笑った。今、この男は堪えようとして吹き出し笑いをしやがった。
『厨二病』の意味は分からないですがね、今ので褒め言葉じゃないことだけは、十分に理解した。
「ちょっと、か、カズマ君？」
「いや、悪い悪い。その、なんだ。全然悪気は無いんだけどさ。――――ブフゥ！」
「おい、悪気が無いなら、その変な笑い方を止めろ！」
「分かった、分かったから頭を揺らすな！」
全く、この男は。だいたい、この姿は俺が望んだ訳じゃない。Lの奴が勝手にデザイ

ンしたんだ。
　……いや、俺個人としては格好良いとは思うけどさ。
「んで、アンタはこの世界に来る特典として、その格好を貰ったわけか？」
「ん、特典？」
「いや。だってさ、アンタも若くして死んじまって。んで転生する代わりに、この世界の魔王を倒すように言われたんじゃ無いのか？」
「……まあ、確かに。この世界の魔王を倒す様に、みたいな事は言われたな」
「だろ。だったら、その格好はその為の特典なんじゃないのか」
「うーん。そう言われれば、そんな気もするが。いや、違うか？」
　そう言われれば、そう捉えることも出来る気がするが、それだと色々と噛み合わない部分が多い気がする。
「ちゃんと説明されてないのかな。多分、お前は俺の後にこの世界に来てる訳だから、恐らく金髪の天使さんが説明をしてくれたんだよな？」
「金髪の、天使い？」
「そうだよ。すっごい美人のさ」
「うーん。確かに金髪で、すごい美少女だったのは認めるが、天使かなぁ？　どちらかと言うと、アレは邪神とかの方が近い気が――――イタタタタタタっ!?」

「お、おい！　何だ急に、大丈夫か!?」
「ぐ、お、で、電波が……っ」
「は？　電波？　受信してるのか？」
頭の中で、『誰が邪神だ！』とか『頭かち割るぞ！』とか『舐めたこと言うな！』とか、他にも色々と酷い言葉が反響してる。
親和性が高いって、覗き見されやすいって意味か？
マジでキチイ。
「ぐぁ……。スマン……もう、大丈夫」
「本当に大丈夫なのか？」
心配する様な視線ではない。胡散臭い相手を見るような瞳のカズマ君に、コクリと頷いて返事をする。
「まあ、なんだ。話を総合すると、どうやら俺はその特典の結果？　この見た目になっている――様なものらしい」
「……俺が言うのも何だけど、貴重な特典をそんな事に使うとは」
「いや、違うぞ。この姿は力を持つ者の証明だからな。何故なら俺は、この世界の魔王を打ち倒して、次の魔王になる男だからだ」
「……へぇ」

グッとサムズアップしながら言い切って見せたのだが、どういう訳かカズマ君の反応が冷ややかを通り越して凍っているように見える。
「そうか。まぁ、魔王なんてなろうとするには、見た目も重要だもんな。頑張れよ」
「あ、うん。ありがとう」
ポンポン、と肩を叩きながら頷いている所を見るに……応援してくれているのか？
よし。俺が立派な神や魔王だかになった暁には、君を俺の配下に転生させようじゃないか。
「そう言えば、カズマ君の特典は何を？」
「うっ……！　お、俺の特典？」
「そう。色々と頭も回りそうだし、何か考えて特典とか貰えたのかな？」
「いやぁ、俺は……」
自身の特典のことになったら途端に冴えない表情に変化するカズマ君。
コレは、そうそう人に教えないと言う冒険者としての矜持か。
「カズマさーん！　何処にいるのー！　私なんですけどー！」
「ぐっ……っ」
不意に酒場内に良く通る声が響いた。
視線を向ければ、それはカズマ君の仲間であるアクアだが、何故に彼は不思議な顔色

に変化してるんだ？

「あ、居た居た。もう、居るなら返事しなさいよね。お陰で店の中を行ったり来たりしちゃったじゃないの――――って、コッチは、確かさっきの」

「こんにちわ」

プンスカと怒る仕草をするアクアに対して、カズマ君は所在無さげに眉間に皺を作った。

「俺の特典、コイツ」

ボソッと告げられた言葉に、思わず『は？』と聞き返した。

耳が遠くなったのかな、まだ生まれて間もないのに。

「だから、俺の転生特典はコイツなんだよ」

「なになに、何の話の最中なのよ？」

絞り出すような言葉を吐き出すカズマ君。対してアクアの方は、興味深そうな表情でズイっと俺たちの間に顔を突っ込んできた。

その際にチラリと見えた彼女の胸元に、俺は全てを理解したのだ。

「……カズマ君も男の子だもんな。その、『何でもあげる』なんて言われたら、そんな事を言っちゃったりもするよな。うん」

「ちょっと、待てっ！　お前は何か盛大に勘違いをしてるぞ！」

「大丈夫。大丈夫だって。こんな事くらいで、カズマ君からの恩を忘れるような事はしないから。風呂代だけだが」
「だから、違うって言ってるだろ！」
「ちょっと、私には全然話が見えないんですけど。私を除け者にするとか、どういう了見なのよ」
　ムスッと頬を膨らませるアクア。
　不憫な奴……。
「いや。カズマ君の所為で、君は苦労をしてるんだなって話」
「あー、成程。カズマが遂に私に懺悔をする気になったという事ね。フフン。全く、この麗しいアクア様をカエルの粘液塗れにした時はどうしてくれようかと思ったけど。
　まぁ……そうねぇ。今日のところは、カエルの唐揚げとシュワシュワをいつもより１本多く付けることで、特別に許して上げるわ」
　不憫なっ!?